



リンパ腫の臨床と研究の魅力

菅谷 本日は、リンパ腫とアレルギーの両方を専門とされている戸倉先生をお招きして、「リンパ腫研究とアレルギー研究の共通点」についてお話をうかがいます。まず、先生がリンパ腫の研究を始められたきっかけからお聞かせください。

戸倉 浜松医科大学の皮膚科の初代教授が山田瑞穂先生ですし、入局直後のローテートで最初に配属された浜松労災病院の内科でも、骨髄穿刺をしたり、骨髄液中の metamyelocyte や promyelocyte を数えたりしていました。血液の形態を見るような仕事は好きだったので、大学に戻ってからもリンパ腫の研究を続けることにしました。

菅谷 私の場合は、研修医時代にびまん性大細胞型B細胞リンパ腫、原発性皮膚 γ δ T細胞リンパ腫などの珍しい症例を経験したことがきっかけになりました。皮膚リンフォーマ研究会で発表したのですが、非常に白熱した議論になったのを覚えています。

戸倉 皮膚リンフォーマ研究会では、皆さん丁々発止でしたね。私も研究の初期に、当時はまだそれほど知られていなかった lymphomatoid papulosis の論文が“Archives of Dermatology”に掲載され、疾患の命名者から手紙をもらったりした成功体験の影響は大きかったと思います。

菅谷 研究者にとって最大のポイントは、疾患に興味をもてるかどうかですね。リンパ腫は、若い研究者があまり増

えない状況が続く、いまや臨床試験やガイドラインの策定にあたって人材が不足するほどの事態になってきています。

戸倉 由々しき問題ですね。局面状類乾癬なども含めると、皮膚症状のあるリンパ腫の患者さんは相当数おられますし、専門的に診られる医師がある程度必要です。確かにリンパ腫は難しく、とっつきにくいところがありますが、重要な分野ですので、若い人にもぜひ興味をもってもらいたいと思います。いま日本では専門家が少ないので、何年かしっかりと研究すれば、国内で十指に入る専門家になれるチャンスでもあります。

菅谷 日本のリンパ腫の研究環境について、ご意見があればお聞かせください。

戸倉 海外では症例数を非常に多くした集積臨床研究が主流になっており、日本の一施設内で行われるような研究は、国際的にはインパクトが弱いといえます。今後は医師主導治験なども増えてくると思いますので、国内の研究者同士で連携しながら進めることで、日本の国際的なプレゼンスを高めていくことが求められます。

リンパ腫とアレルギー疾患の共通点

1. Th2

菅谷 リンパ腫とアレルギー疾患にはいくつかの共通点があると思います。まずTh2やTSLP (thymic stromal lymphopoietin) の関連について、先生のお考えをお聞かせください。

戸倉 アトピー性皮膚炎 (atopic dermatitis ; AD) はTh2優位のアレルギー疾患であり、リンパ腫はそのTh2が悪性腫瘍化したものだと考えることができます。正常で活性化している状態と、悪性腫瘍化したものを明確に区別するのは難しいですし、症例によってはADと菌状息肉症の鑑別はかなり困難でしょう(図1)。

菅谷 合併例や続発例もありますから、なおさらですね。われわれは菌状息肉症のTh2環境においてもTSLPが重要な役割を果たすことを報告しました(図2)が、まさに同じ頃に、戸倉先生がADにおいて、TSLPが末梢のリンパ球の増殖や活性化に直接かかわるという論文を発表され、リンパ腫とADの研究手法がリンクしたように感じました。

戸倉 TSLPに関しては、樹状細胞に働くという通説にずっと疑いをもっていました。そこでTSLPの受容体を見てみると、T細胞、特にTh2に多く発現しており、実際にTSLPを添加してみると、Th2が活性化されます。ですから、TSLPは樹状細胞だけでなく、Th2にも直接働いているのだと私は考えています。そうでなければ、アレルギー症状があれほどひどくなることはないと思うのです。